

### 3月のGlobal Sessionレポート

期日：2025年3月29日（土）10：30～12：30

場所：ガレリア3階会議室

ゲスト：濱田雅子さん（アメリカ服飾社会史研究者・神戸市在住）

タイトル：1940年代のアメリカ服飾史—第二次世界大戦がファッションに与えた影響—

コーディネーター：亀田博さん（ツアー・コンダクター）

主催：Office Com Junto

共催：第50回アメリカ服飾社会史研究会・亀岡国際交流協会

参加者：8名

コーディネーター(亀田さん)：では、自己紹介をまず、お願いします。

Y・Hさん：仕事で亀岡を離れていて、2年前に退職後、戻って来ました。今は脳活につとめ、このGlobal Sessionにも参加しています。

R・Aさん：地域日本語コーディネーターなどをしています。

R・Eさん：亀岡で絵本作りや子育て支援などをして、いっしょに育ってきています。

A・Oさん：Global Sessionは何回か参加しています。京都先端大学で勤務をしています。

この大学は太秦と亀岡に二つに分かれています。9月から、今の学部に加えて留学生のコースが新設され、30人から40人ほどの留学生が来る予定です。日本語の学習をしていなくても、英語での授業が開設される予定です。今まで以上に新しい出会いがありそうです。

児嶋：この濱田さんとのシリーズは、28回目になり、Global Session自体は、385回目になります。

亀田さん：では、濱田さん、お願いします。

濱田さん：以前は、武庫川女子大で仕事をしていて、2009年にアメリカ服飾社会史研究会を立ち上げました。このGlobal Sessionにも亀岡に来てやっていましたが、コロナ以後はオンラインでやっています。私は、最初から日本語での講座をやっていますが、最近ではGlobal Sessionも日本語でのやり方が主体と聞いています。私は、アメリカ服飾社会史の分野は、マイナーな世界なので、翻訳を私のフィールドワークを日本の柱として取り組んで来ました。

今朝、トランプさんは、「スミソニアン美術館が歴史的な人権に関する展示を続けるなら、その展示の精神を変えろ」と批判したと聞きました。庶民の文化をパイオニアとして取り組んで来た人が亡くなり、押されて変わって行くのは残念です。

では、1940年代のアメリカの服飾史—第二次世界大戦のファッションに与えた影響—についてイギリスとアメリカを対象にしてお話いたします。

濱田雅子の服飾講座「服飾からみた生活文化」シリーズ28です。テーマは「1940年代アメリカの服飾史—第二次世界大戦がファッションに与えた影響—」です。ゲストスピーカー

は、アメリカ服飾社会史研究会会長の濱田雅子氏が務め、コーディネーターはツアーコンダクターの亀田博氏です。主催は Office Com Junto、共催は第 50 回アメリカ服飾社会史研究会、亀岡国際交流協会です。

私は翻訳とフィールドワークの二本の柱で研究してきました

講座の全体構成は以下の通りです。

I 参考文献

II 歴史的概観 -1920 年から 1940 年までの世界全体のスナップショット-

III 第二次世界大戦がファッションに与えた影響

IV ハリウッドからブロードウェイまで -戦争が娯楽産業に与えた影響-

V ファッションにおける合成繊維革命の始まり VI 戦時中に影響を与えたデザイナーたち

VII 結論

I 参考文献

Meghann Mason 著『The Impact of World War II on Women's Fashion in the United States and Britain, Master of Arts in Theatre, Department of Theatre, December 2011』と、濱田雅子著『パリ・モードからアメリカン・ルックへ アメリカ服飾社会史近現代篇』(POD 出版、2019 年)が挙げられています。

概要として、ファッションと衣装デザインは、第二次世界大戦によってもたらされた多くの制限のために影響を受け、変化しました。第二次世界大戦は、社会的、技術的、経済的、政治的に大きな変化の指標となりました。第二次世界大戦は全世界に影響を及ぼしましたが、本講座では特に、第二次世界大戦がアメリカとイギリスのファッションとコスチューム・デザインに与えた影響を探ります。

II 歴史的概観 -1920 年から 1940 年までの世界全体のスナップショット-

第一次世界大戦の終結と、それに続くヴェルサイユ条約について解説されます。第一次世界大戦では、連合国(アメリカ、フランス、イギリス、ベルギー、イタリア、日本、ロシア)が中央列強(ドイツ、オーストリア=ハンガリー、トルコ、ブルガリア)と戦い、1918年に終結、ヴェルサイユ条約が締結されました。この条約により、第一次世界大戦を引き起こしたドイツに責任があるとされ、連合国への賠償が義務付けられました。中央列強は連合国に賠償金を支払い、様々な罰則を受け入れる条約に調印しました。

ヴェルサイユ条約後の 1920 年代、ドイツは条約で課された義務を履行しましたが、賠償金支払いのためアメリカからの借款に依存し、国際貿易、特にアメリカとの貿易に頼りました。しかし、アメリカは 1922 年に輸入品に高関税を課し、国際貿易は困難となり、賠償金支払いはほぼ不可能になりました。

1929 年には、アメリカの株式市場が暴落し、大恐慌が発生しました。第一次世界大戦で連合国側だった日本は、戦勝国として認められることを期待していましたが、西側諸国から太平洋の支配者として認められていないと感じていました。アメリカが世界各国に融資していたため、世界恐慌は全世界に波及しました。有色人種、特にアジア人に対する差別はアメリカでも顕著で、1913 年には外国人土地法が制定されました(アジア系移民は土地の購入・賃貸不可)。日本は 1919 年に国際連盟憲章に人種平等条項を提案しましたが、却下されました。

19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、日本は中国、ロシアとの戦争で中国領土を獲得し、満州(中国東部)と朝鮮半島の一部を支配下に置きました。資源の乏しい日本にとって、中国領土の支配は重要でした。1930 年代までに、日本は中国の一部を支配し、その地域の資源と貿易を支配しました。ヴェルサイユ条約締結時、アメリカは日本に中国の一部を譲歩させましたが、日本は中国での軍事的プレゼンスを維持しました。このアメリカとの協定により、日本の工業生産は倍増し、輸出の 40%がアメリカ向けとなりました。

1929 年のアメリカ株式市場大暴落により、日米間の輸出ビジネスは激減し、生糸産業だけでも 1 年間で 65%減少しました。アメリカは輸入税を 50%に引き上げるスムート・ホーリ

一関税を実施し、1929年から1934年にかけて、世界貿易は全体として約66%減少しました。スムート・ホーリー関税は、国際関係における危険な時代に、国家間の信頼と協力を促進するものではありませんでした。関税は当初、国内の米国経済を維持するために導入されましたが、実際には他国を不況に陥れ、軍国主義的な姿勢を強めるだけで、米国の孤立主義を強める結果となりました。

1922年、ベニート・ムッソリーニがイタリアの独裁者として権力を掌握し、ヴェルサイユ条約が無視したイタリアの敬意、土地、賠償金を得ようとし、ファシズムを導入しました。ファシズムは、独裁者による全体主義的な政府体制であり、反対意見の弾圧、産業・商業の統制、攻撃的なナショナリズム、人種差別を特徴とします。

ドイツ経済の衰退とともに、カリスマ的な政治指導者アドルフ・ヒトラーが登場しました。ヒトラーは、ドイツは第一次世界大戦の責任を負わないと宣言し、賠償金支払いを停止、ドイツのものとする土地を取り戻すと主張しました。彼はナチ党を結成し、1933年にドイツ首相に就任しました。ヒトラーは、軍事的価値観と目標を国家的に採用することで、ドイツ民族の生存を追求する社会ダーウィニズムを信奉し、ムッソリーニのファシズムに傾倒し、独裁政治のスタイルを模倣しました。

イタリア、日本、ドイツは同盟を結び、枢軸国と名付けられました。この同盟は、ヨーロッパ大陸の大部分に対するドイツの覇権、地中海に対するイタリアの覇権、東アジアと太平洋に対する日本の覇権を相互に承認しました。

1939年9月、ドイツがポーランドに侵攻し、第二次世界大戦が勃発しました。イギリスとフランスはドイツに宣戦布告しました。ファッション界における重要な出来事の一つは、1940年6月14日のナチス・ドイツによるパリ占領です。パリは当時ファッションの中心地であり、世界の流行を牽引していました。シャネル、ジャン・パトゥー、ジャンヌ・ランバン、エルザ・スキヤパレリなどの主要なファッションハウスがパリに拠点を置いていました。1939年にフランスが宣戦布告すると、多くのデザイナーが国外に避難、店を閉鎖、または営業を続けましたが、1940年の占領により世界から孤立しました。パリの孤立は、アメリカやイギリスがファッション界の空白を埋める機会となりました。

アメリカは、武器、軍需物資、資金援助を通じて連合国を支援しました。フランクリン・ルーズベルト大統領は、1941年に lend-lease 法を提案し、成立に貢献しました。ルーズベルトは、アメリカを戦争に巻き込まないと公約していましたが、イギリスを支援し、アメリカを「民主主義の兵器廠」と位置づけました。1941年12月には真珠湾が爆撃され、米国の戦争から孤立を保つ計画は頓挫しました。

### III 第二次世界大戦がファッションに与えた影響

イギリス篇として、配給制について解説されます。1940年1月に食料配給が開始され、1年後には衣料品も配給制となりました。配給、ユーティリティ、緊縮財政がキーワードとなり、国民登録が実施され、配給クーポンブックに必要な身分証明書が発行されました。配給制は世界中で受け入れられ、創造性を開花させ、国民を団結させました。産業革命以前からの機械化と繊維産業の発展が配給制度を円滑にしました。物資不足でクリネックスなどの日用品も不足し、衣料品の輸入禁止、違反者には罰金が科せられ、資金は戦争活動へと回されました。これはアメリカの孤立経済政策と類似しています。図1には、1942年頃のイギリスのレーション・ブックが示されています。

ヘイゼル・バニーの寄稿によると、IDカードと配給クーポンブックが発行され、年間の衣料品クーポンは段階的に減少(66点→24点)しました。14-16歳には追加クーポンが支給され、作業着には追加ポイントが付与されましたが、マタニティウェアは考慮されませんでした。クーポンブックの使用法として、食糧配給簿から直ちに切り離すこと、Dページおよび1ページ目の空欄に名義人の氏名、住所、登録番号を墨字で記入すること、買い物の際は自分で切り取らず店員に渡すこと、郵便で注文する場合はクーポンを切り取って書留郵便で送付すること、兵役に就く場合は持参すること、死亡した人の衣服台帳は死亡届時に登録所に渡すこと、本書は政府の所有物であり発行された本人または代理のみが使用できること、紛失に注意することなどが記載されています。

衣料品のクーポンは、コート、ドレス、パジャマ、ブラウス、靴下など、アイテムごとに

必要な数が異なりました。表 1 には女性用のクーポン価値が示されており、裏地付きマッキントッシュまたはコート 28 インチ以上は 14 点、28 インチ未満は 11 点、ショートコートまたはジャケットは 11 点、ウールのフロック、ガウンまたはドレスは 11 点、その他の生地、フロック、ガウンまたはドレスは 7 点、ガールズスカート付きボディスまたはジムチュニックは 8 点、パジャマは 8 点、ディバイデッドスカートまたはスカート[フル]は 7 点、ナイトドレスは 6 点、ダンガリーまたはオーバーオールは 6 点、ブラウス、シャツ、スポーツトップ、カーディガンは 5 点、スリッパ、ブーツ、靴は 5 点、コルセットを含むその他の衣類は 5 点、ペチコート、スリッパ、ニッカーズ/コンボは 4 点、エプロンまたはピナフォアは 3 点、スカーフ、手袋、ミトンまたはマフは 2 点、ストッキング 1 組は 2 点、足首用ソックスは 1 点、ヤードのウール布 36 インチ幅は 3 点、2 オンスのウール編み糸は 1 点となっています。ユーティリティ・スキーム (Utility Scheme) は、衣料品の種類を減らす計画として知られるようになりました。

実用衣料制度 (ユーティリティ・スキーム) は、衣料品の種類を減らす計画であり、既製服の改善に貢献し、効率的かつ迅速な衣服製造プロセスを開発し、戦後も継続されました。1939-41 年には、衣料品価格が 2 倍以上に高騰しましたが、実用衣料は価格統制の手段となりました。資本の 75%以上を実用衣料に使用した工場には奨励金が与えられ、生産された衣服のユーティリティ・スキーム割合は、1942 年の 50%から終戦時には 85%に達しました。ユーティリティ・スキームの衣料には「CC41 (Civilian Clothing 1941)」ラベルの表示が義務付けられました。1939-41 年の衣料品価格の高騰により、中流階級以下の女性は高価な衣料品を入手困難になりましたが、実用衣料が価格抑制に貢献しました。

1941 年、ヴィクトル・デ・ラヴェレイが考案した「V」サインは、チャーチル首相が広め、スローガンと「V」マークが広範囲に使用されました。ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館に所蔵されている 1942 年のイギリスのレーヨン製ユーティリティ・ドレスは、シンプルで着やすく快適でありながらエレガントな新しいデザインを示しています。これは、ファッションを国家的なものとして維持し、戦費確保と国民団結を図るものであり、デザイナー名は非公開でした。このスタイルは、世界、特にドイツの反抗的な若者「スウィング・キッズ」に影響を与え、彼らは英国紳士風スタイルを模倣しました。チャーチルもその対象の一人でした。「スウィング・キッズ」やパリの「Les Zazous」のイラストレーション (1942 年頃) も紹介されています。

アメリカ篇として、既製服の発達について解説されます。1860 年代の南北戦争における軍服需要が男性用既製服の契機となり、兵士の採寸データがサイズ体系確立に貢献し、女性用サイズも開発されました。1941 年 12 月の真珠湾攻撃後、米国が参戦すると、ファッションデザインは制限され、戦争生産委員会 (War Production Board、WPB) が設置され、資源と燃料の生産・配分を規制しました。WPB の下、衣料品業界ルール L-85 が策定されました。L は Limitation Order (制限命令) の略で、L-85 は婦人服を対象とし、違反メーカーには重い罰金と懲役刑が科せられました。

メーカーに対する L-85 指令の例として、ブラウスでは、タックやプリーツを使用する場合フリルは使用できない、フードなし、25 平方インチ以上の生地を使用したパッチポケットの使用禁止などが挙げられました。コートでは、バイ・スイングやノーフォーク・タイプ (背中の中側の切り込み) のバックは使用しない、肩にエポーレットやタブは付けない、袖周りは 16 インチ半までとされました。スカート、スカートスーツ、プレイスーツでは、非ウール生地または 9 オンス以下のウール生地で作られたミスサイズ 16 の場合、裾周りは 81 インチから 78 インチに縮小、キュロットスカート、リバーシブルスカート、裏地付きスカート、キルティングスカート、スケートスカートは不可、ウエストの幅が 3 インチを超えるものは不可とされました。ドレスでは、ボタン 2 個、袖口のボタンホールは 2 個まで、300 平方インチ以上のキルティングは不可、イブニングドレス (タフタ、フラットサテン、類似素材) のスリーブは 144 インチのままとされました。

国際的な雑誌『VOGUE』は、トレンドの世界的な伝達を加速しました。1909 年に米国で創刊され、1920 年には英国とフランスで国際版が発行され、服のシルエット変化が加速しました。『VOGUE』誌の表紙 (1942 年 1 月号) は、アメリカの参戦後初めてのもので、アメリカ

人女性が直面することになる新しい生活と、その中でいかにゴージャスに見せるかを語っていました。20世紀初頭のファッションの変化には、交通機関の発達も大きく影響し、世紀初頭には自転車がレジャー用として普及し、1908年以降には自動車も普及しました。第一次世界大戦時、女性が仕事場へスプリット・スカートを着用したことが、第二次世界大戦中の実用的な女性用仕事着の先駆けとなりました。女性も工場や戦場へ動員され、第一次世界大戦の女性制服は男性軍服に類似していました。作業中はズボンが着用され、ノーフォークジャケットも女性用が登場しましたが、社会的偏見から多くの場合ロングスカートが着用されました。レーン・ブライアントのカタログ広告（1943年頃、インディアナ州）には、普遍的かつ体系的なクーポンプログラムが示されており、配給券3号で靴スタンプと引き換えに靴を購入でき、世帯間で譲渡可能でした。しかし、シアーズ・ローバック・アンド・カンパニーのような会社は、他の配給券で靴を提供していました。配給制下で人気になったラフィアとコルクのウェッジ（サルヴァトーレ・フェラガモ、1943年頃）は、1935年にサルヴァトーレ・フェラガモがコルク底ウェッジを発表したもので、靴底は木製やコルク、アッパーは天然繊維でした。

1941年1月には、民間衣料への絹の使用が禁止され、絹はパラシュート製造に転用されました。物資不足はUボートによる補給船攻撃も原因であり、WLA（Women's Land Army）が食料生産を担いました。女性たちは実際のストックキングの代わりに脚の甲に黒い線を引き、脚の化粧をしました。『Woman's Own, Women's Hat Portraits, 1945, U.K., Gliclee Print』には、日常的な女性にもスター女優にも簡単にできるスタイルが紹介されており、製品をほとんど使わず、髪をピンカールに巻いたり、布で巻いたりすることもできました。ピンカールや布巻きで簡単にセットできるスタイルは、スター女優にも日常の女性にも普及しました。

#### IV ハリウッドからブロードウェイまで —戦争が娯楽産業に与えた影響—

映画『カサブランカ』（1942年）において、プロデューサーはイングリッド・バーグマンの衣装の華美さを懸念し、難民設定に合わせた質素な衣装を意図しました。イングリッド・バーグマンは、クリップ・ブローチ付きの白いスーツを着用しています（1943年、ハリウッド）。エリザベス・アーデンの化粧広告（1943年頃）は、メイクアップの特殊効果分野の発展と、戦争支援、美と士気を維持することの重要性を強調しています。当時の雑誌やプロパガンダ・ポスターは、女性たちが士気を高めることができることをアピールしていました。マックス・ファクターの広告（1943年頃、カリフォルニア州ハリウッド）は、スターたちが銀幕で彼の化粧品を使用していることを例に、一般の女性にも同様の化粧品の使用を奨励し、士気を高めるために「ビクトリー・レッド」などの商品名が作られました。タッシーの口紅「Auxiliary Red」や「Jeep Red」、キューテックスの赤いマニキュア「Alert」なども同様の目的で販売されました。絹やナイロンのストックキングが不足したため、『ムーヴィーランド』でも触れられているように、脚の化粧が流行しました。

1935年頃のマックス・ファクターのパッケージは金属とガラス製でしたが、プラスチックの開発が進み、最初のプラスチックは植物繊維セルロース由来で、ヘンリー・フォードは大豆プラスチックを開発し、ドイツ人は牛の血液からプラスチックを製造しました。「プラスチック」という言葉は、ラテン語の「成形できるもの」を意味する「plasticas」に由来します。1942年頃のマックス・ファクターのパッケージは、主にプラスチック製で、金属保護のため、化粧品業界はパッケージをプラスチックへ転換し、パウダー、口紅、コールドクリーム、マスカラなどがプラスチック容器に入れられました。1943年頃のロンドンの「タンゲ」リップカラーの英国広告も、プラスチック容器の使用を示しています。

ベティ・グラブルの『Victory Rolls』（1943年頃）は、前髪を樽巻きにしたスタイルで、工場労働者のスヌード（髪をまとめ、顔や首にかからないようにするためのヘアネットの一種）と共に、戦時中のヘアスタイルとして特徴的でした。1944年頃のハリウッドの「ワーナーズ・ハリウッド・キャンティーン」の広告は、ワーナー・ブラザーズ映画『ハリウッド・キャンティーン』（1944年）の製作と、軍人向け慰安施設キャンティーン存在を示しています。ソル・レッサー・プロダクションの映画ポスター『ステージ・ドア・キャンティーン』（1943年）も、同様の慰安施設の様子を表しています。

## V ファッションにおける合成繊維革命の始まり

新しい合成繊維は衣料品、家庭用品、産業用途に普及し、複数素材とのブレンドが主流になりました。戦争需要が革新的な素材開発を促進しました。1855年にビスコースが誕生し、1892年に特許取得されたこの初の「人工」繊維は、天然ポリマー（木材セルロース）を化学的に加工した半合成繊維であり、1910年に英国、1924年に米国で商業生産が開始され、1924年に米国で「レーヨン」と改称され、絹の代用品として利用されました。元々火薬メーカーであったデュポンは、セロハンに関心を持ち、ビスコース工場とセロハン工場を建設、1924年にセロハンシートの製造を開始しました。1926年に耐湿性が改善されたセロハン包装が普及し、エルザ・スキヤパレリがセロファン製「ガラスのケープ」を発表しました（1934年、パリ）。

デュポンは純合成繊維を求め、カロザースを招聘、カロザースは基礎研究に専念しました。1931年、カロザースとジュリアン・ヒルがナイロンの原型を発見し、1931年のNYタイムズ報道で「化学者が合成シルクを生産」と報じられましたが、当初の「合成シルク」は製造コストが高く、融点が高いという問題を抱えていました。1934年、ファイバー66が誕生し、冷間延伸可能で融点195℃という特性を持ちました。デュポンは量産化を推進しましたが、カロザースは研究から外され、疎外感から重い鬱になり、1937年4月29日に自殺しました。ナイロン・ストッキングは、1939年4月のニューヨーク万国博覧会で初めて世界に紹介されました。

## VI 戦時中に影響を与えたデザイナーたち

1920年代後半には、エリートだけでなく日常的な女性のための服を作ることで名を上げ始めたデザイナーたちがいました。第二次世界大戦まで、そしてパリがナチス政権に占領された後も、ファッションに大きな影響を与えた6人のデザイナーとは、ガブリエル・「ココ」・シャネル（1883-1971）、エルザ・スキヤパレリ（1890-1973）、エイドリアン（1903-1959）、メインボッチャー（1890-1976）、アーノルド・レヴァー、エディス・ヘッド（1897-1981）です。彼女たちの重要性は、戦時中、「労働者階級」の女性が身につけるテキスタイルや、贅沢が生きる数少ない場所のひとつであるミリタリーで頭を飾るイメージーションによって、女性のルックスに影響を与え、女性の服装に貢献したという事実にあります。

ココ・シャネルは、1926年に「リトル・ブラック・ドレス」を発表し、香水の世界にも足を踏み入れ、有名な「シャネル No. 5」を発売するなど、1920年代と1930年代のファッション界に大きな影響を与えました。エルザ・スキヤパレリは、蝶結びのセーター（1927年）や、サルバドール・ダリとのコラボレーションによる「靴の帽子」（1937-38年）など、独創的なデザインで知られています。1930年代には、ゴムとシルクで作られ、ほとんどボーンが入っていない女性用コルセットが発明されました。エイドリアンは、第二次世界大戦前はハリウッド、戦中は注文服デザイナーとして活躍し、ブロードウェイからキャリアを開始、MGMチーフ・コスチューム・デザイナーとなり、映画衣装デザインで世界的なファッションに影響を与えました。代表作は、ジョーン・クロフォードが着用した「レティ・リントンのドレス」（1932年）です。メインボッチャーは、1942年にアメリカ海軍 WAVES (Women Accepted for Voluntary Emergency Service) の制服をデザインし、SPARS (沿岸警備隊女性予備役) の制服もデザインしました。これらの制服は女性軍服として最も魅力的で、募集広告にも使用されました。戦後も活躍し、1952年には女性用 U.S.M.C. (アメリカ海兵隊) の制服もデザインしました。エディス・ヘッドは、第二次世界大戦前からハリウッドで活躍し、1923年にパラマウント映画に入社、デザインアシスタントとして採用され、映画『私は魔女と結婚した』（1942年）の衣装などを担当しました。

## VII 結論

戦時中の資源制限が合成繊維開発・普及を促進。

ファッションは生地だけでなく、スタイル、シルエットも変化。

シンプルなスタイル、工夫を凝らしたデザインが求められる。

戦時中に生まれたシルエットや合成繊維は現代にも影響。

配給制が社会階級差を減少、政府主導で共通ファッションへ。  
戦争が米英ファッションに社会的・美学的制約を課した。

- ・ 亀田さん：質問があればどうぞ。
- ・ Y・H さん：ありがとうございます。説明の中で L-85 に、こまやかな規制があったと
- ・ 言われましたが、どの程度守られて居たのでしょうか？
- ・ 濱田さん：羊毛やシルクなどは規制になりましたね。代わりに綿の使用をすとか
- ・ ありました。また、染料やゴムの制限があり、パンツ用のゴムなどが不足した
- ・ ようです。かわりにコルセットなどは、ひもにするとか。ジュエリーは、ポタ
- ・ ンにしたり、皮は兵隊用の靴にしたりとか。
- ・ Y・H さん：規制に対する対抗措置などはありましたか？
- ・ 濱田さん：1940 年代のアメリカ人女性は、靴をのぞいて、食料券で購入でき、必要
- ・ な物はそのクーポン券で間に合わせたようです。ボタンやジッパーは、しんち
- ・ ゆうのタブやフックで固定したり、アメリカ人デザイナーは、制限に対して使
- ・ える物は、使っていたと思います。先ほど紹介しました私の書いた参考文献『パ
- ・ リモードからアメリカンルックへ』は、賞をもらっていますが、その中に詳しく
- ・ 書いていますので、児嶋さんに貸してもらってください。戦時下では知恵を
- ・ 出し合っていたと思います。
- ・ Y・H さん：戦時中のファッションを見せてもらいましたが、日本の女性はモンペく
- ・ ら
- ・ いったと思います。アメリカの戦時中のファッションとは大きなちがいがあ
- ・ りますね。そんな国と戦争して勝てるわけがないと思いました。
- ・ 濱田さん：私は、1942 年生まれで、小 1 まで仙台に疎開していました。空襲警報が
- ・ なり、母は、クーポン券で、米などを買い、サツマイモもよく食べていました。
- ・ カーテンは暗幕をはり、灯りも消していました。昭和 25 年になり、父が神戸大学に
- ・ 招聘されて、神戸に来ました。米国の進駐軍はどこにもいて、傷痍軍人さんが、
- ・ 白い服を着て街にいました。母は、着物を作り、食べ物と交換したりしていま
- ・ した。
- ・ A・O さん：アクセサリなど、戦時中のアメリカの工夫するエネルギーが、制限が
- ・ ある中でよくあるなと思いました。着る人もいろいろ選び、活力がありますね。
- ・ 同じ戦時中とはいえ、余裕の度合いがちがうと思いました。
- ・ 濱田さん：アメリカの友人で以前京都を案内したことがあるひとですが、メトロポ
- ・ リタン美術館のコスチューム部門の主任学芸員をしていた人ですが、大学と専
- ・ 門学校を差別するのはおかしいと言っていました。理論とものづくりが分離す
- ・ るのは、おかしいと。私の母も子どもの服を手作りしていましたが、あとで丈

- ・ を伸ばせるようにしていたりしていました。
- ・ 児嶋： 日本の戦後の教育では、戦争前のことを教えられてもいないし、教師になっても、それを習ってもいないので、教えてもいませんでした。本当は、なぜ、
- ・ 日本が満州国建設に進んだのかとか、朝鮮半島や台湾の植民地化を進めたのか
- ・ など、考え、将来のために学ぶ必要があると思っています。
- ・ R・A さん：ファッションに関しては、民主主義が発展したアメリカに何度も行きました。日本人がアメリカで解析した道具でアメリカ人はまねをしようとして
- ・ ました。日本人は柔軟性が少ないのでできるのに、できないとっていたようです。
- ・ 私の母も、工夫したものを着て自由にさせてもらっていたようです。アメリカ
- ・ は移民が集まった多民族国家です。日本は島からでられないような性質を持っ
- ・ ていたのだと思います。戦後はアメリカの占領下で全くの自由ではなかったの
- ・ ですが。今のトランプ政権はこれでいけるのかと疑っています。研究者は皆、
- ・ アメリカを出たがっているようです。日本は理工系だけに研究費を出すような
- ・ やり方ですが。
- ・ 児嶋：明治時代からの歴史について見えていないと、現実が見えないのかもしれない
- ・ と思います。
- ・ R・A さん：戦争前も戦後も世界に追いつけなかったのかもしれませんが。今後は世界
- ・ に発信していければ、進めるとは思います。
- ・ 亀田さん：イタリアのフィレンツェの博物館には、フェラガモの靴が展示されてい
- ・ ます。フェラガモは、第2次世界大戦前にアメリカのカリフォルニアに行きま
- ・ した。ハリウッドの俳優のひとりのオードリー・ヘップバーンは、フェラガモ
- ・ の靴しかはかないようです。博物館には、オードリーの靴なども展示されてい
- ・ ます。旅行者にも靴の型で靴も作ってくれます。日本人は、特に女性のサイズ
- ・ が合わないようですが。紳士物の靴は、皮で作るのですが、中に真ちゅうが入
- ・ っているのです、はきやすいです。日本では2.3万円くらいするのですが、イタ
- ・ リアの皮はいいので、長持ちします。現在は、メルカリで時々見えています。濱
- ・ 田さんの写真のコルクの靴の画像がありましたが、すごい発明だと思います。
- ・ 濱田さん：靴と言えば、イタリアですね。フェラガモの靴をはいていらっしゃるの
- ・ ですか？どこへ行ったら手に入るのですか？
- ・ 亀田さん：登山靴はイタリアで買いました。ドイツは、靴を見ると医者いらずと言
- ・ われています。それは、体が悪くなると、靴が変形するので、靴屋さんがドク
- ・ ターみたいと言われていています。日本は、昔は下駄でしたが。
- ・ 濱田さん：靴と健康は関係がありますね。インソールにどのようなのを入れたら
- ・ いいのかを運動選手の靴の専門家のところに行って測ってもらったことがあ
- ・ ります。
- ・ 亀田さん：ふだんは、私はナイキのスポーツシューズだけでいいです。

- ・ 濱田さん:最近は、パワーポイントをまとめ、AI に要約してもらうことができます。
- ・ 2025年1月に映像で学ぶ西洋服飾史シリーズをYouTube でアップロードしています。服飾専門の人以外の関心にちがいがあることがおもしろいです。次回のGlobal Session の予定の2025年10月には、西洋服飾史を取り上げたいと思っています。マリーアントワネットの髪型とか。

R・Eさんの感想（終了前に出られたので）

お話しを伺っているうちに、戦争がファッションに大きな影響を与えていることに、具体的に気づきました。パラシュート用布が集められたことで、生地を少なくする必要からシンプルでタイトなデザインに、実用的になっていく。生活がどんどん制限される中で、国民や女性達はアイデアや工夫によって逆にいきいきと輝くことで、戦争や理不尽な状況に抵抗していたのだと思いました。現在と似ている社会情勢のあり、焦りを感じます。肥沃な土地・鉱物資源の豊かな国は、ご用心！とてもわかりやすくお話しをしていただきおもしろかったです。ありがとうございました。

## 4月のGlobal Sessionのお知らせ

期日：2025年4月27日（日）10：30～12：00

場所：ガレリア3階会議室

ゲスト：山本咲さん（亀岡多文化センター・亀岡市在住）

タイトル：「いろいろ考えて、日本に帰ってきました。」

コーディネーター：亀田博さん 参加者数：10名

申し込み：児嶋きよみ e-mail：[kiyomi-kojima@gaia.eonet.ne.jp](mailto:kiyomi-kojima@gaia.eonet.ne.jp)



5月のGlobal Session

ゲスト：大槻正一さん

タイトル：「AI のできること・できないこと」

6月：ゲスト：堤健介さん(映画脚本家)

7月：ゲスト：テオ・ディアスさん(ブラジル出身)

8月：ゲスト：大橋晶子さん(元新聞記者)

9月：ゲスト：畑 佳延さん(亀岡在住・退職後、数十年ぶりに亀岡へ)

10月：濱田雅子さん(アメリカ服飾社会史研究者)